

第七章 反響と様々な断片

1 カタロニア語版

以上検証してきた諸グループに、私の知る限りほぼ全ての写本が含まれる。が、すでに究明された家族のどれにも確実には分類できないわずかないくつかが残っている。¹⁾

その内の三つは一つの小グループを構成し、今は失われた古いカタロニア語訳の代わりをしている。その訳は、カタロニア語写本一つ(K)の他にフランス語(K¹)とアラゴン方言(K²)への転訳が一つずつ知られていることから見て、けっこう幸運なものであった。

カタロニア語版は今日唯一リッカルディアーナ図書館写本 Cod. 2048 (旧 S.II.XXXII)に残っている。小型紙写本、150 x 225、現状では皮の背表紙で綴じられた木の装丁、元 67 葉、うち最初と最後白紙。このテキストが占める部分は新たに 1 から 65 の番号が振られている。1 覧組み、密度の異なりあり (19 から 23 行)、千三百年代作、かなり優美、技巧なし。唯一の飾りが章の冒頭の大文字にある (第 36 葉まで)。訂正はけっこう頻繁で、そのいくつかはこの作品とは異なる手とインクによる。第 1 葉表に番号 73 が付され、ごく新しい手で、『スペイン語カタイの歴史』*Istoria del Catay in Lingua Spagnola* のタイトル。同裏に蔵書表 (「本書は……殿の所有になる」) が記されているが、今は抹消されており、私には解読できなかった。最後の紙の表にピエロ・ヴァリエンティ (1440-1513 ca.) が——どこかマンデヴィルから——ノルウェーについての作り話をいくつか転記している²⁾。書き出し (fol.1r) 「ヴェネツィアの高貴な市民マルコ・ポッロ殿語るところの、ガンバツレクを統治したタルタル人の君主であるカタイの大皇帝の支配下にある諸地方諸地域の書、ここに始まる。まず最初に、彼が 26 年にわたって暮らし、以下に書かれてある事どもの真実を知るにいたったタングット地方について述べる。まず、ロプの砂漠と呼ばれる大砂漠を 30 日行程進むと……」。結び (fol.65v) 「町や村や城市

がとても沢山あり、よいオオタカがいっぱいいる。神よ称えられてあれ。ここに本書を終えるゆえ、他のことについては何も述べることはできない。アーメン」。

ヴァティカン図書館 Cod. ottoboniano lat. 2207 は、上と同じ版のフランス語訳を収める。美しい羊皮紙写本で、確実に千四百年代³⁾、全 26 葉、1 欄組み、冒頭美しい色付き。巻末に「リュクサンブールの忠臣」の署名あり（おそらく、著名なサン・ポルの城代家老の息子リニー伯のもの。その文学上の功績と多岐にわたる文化への愛情については、とりわけジャン・ルメール・ド・ベルジェの『救世主の嘆き』に伝えられる）。書き出し(fol.1r): [同上]。結び(fol. 26r)「とてもよい綺麗な村、町、城市がたくさんある。他のことについては、私は本書をここで終わるから述べることはできない。我らが主とその優しき御母の名の称えられてあらんことを。アーメン」。

エスコリアル図書館 Ms. Z. I. 2 は、ff. 58-104 に同版のアラゴン語訳を収める。素晴らしい羊皮紙写本、40 x 27、2 欄組み、細密画と冒頭色付き、マルコの書のほかにヘトゥムの『東方史の華』と哲学もの 2 編を収める。この雑録集は、1377 年から 1396 年まで高位にあった「エルサレム聖ヨハネ騎士団の師ヨハン修道士」の作になる⁴⁾。書き出し: 「ヴェネツィア市民マルコ・ポーロの書ここに始まる。――まず、ロボの砂漠と呼ばれる大砂漠を 30 日行程進むと……」 結び: [同上]。

これら三つの訳のいずれについても、今に伝わっているコピーは先行コピーのあったことを推測さす。フランス語訳にはカタロニア語の痕跡がしごく頻繁で目立つ（citoyen<市民>が ciutada、Venise<ヴェニズ>が Vanecia、contrees<地域>が encontrees 等）ことから、ざっと検証しただけでもカタロニア語からの転訳を前にしていたと確信できる。両言語のさらに大きな類縁性のためそれほど目立たないが、アラゴン語版がカタロニア語版に依ったことも同様に確実である。F を前にしてそれらを対校させるだけでよい。K が元の文をずっとより厳密に訳しているのに対して、K² は頻繁に等位法を従属法に替えたり、また短縮したり倒置したりしていることからして、確実に K の文の更なる手直しであることが明らかである。カタロニア語訳の二次的な反映ではあるけれども、K¹ と K² はしかし、今に伝

わるカタロニア語コピーに由来するわけではなく、さらに古く良好な稿本からである。Kは、現存する三つの写本の中では全体として一番よいが、他の二つのテキストにはない欠落や誤りを呈している。最初のカタロニア語訳がどのようなものであったかについての正確な概念を得ようとすれば、これら写本を三つとも考慮に入れなければならない。

アラゴン王マルティノー2世(1410年没)がバルセロナの私書館に所蔵していた『ロマンス語マルコ・ポーロ』*Marcho polo in romans*は、確実にこのカタロニア語訳の一本である。書き出し(「諸地方の書ここに始まる」)しか我々は知らないが、それは今しがた引いたのと同じである。⁵⁾

内容の点からは、この作品は全体としてFの第57-199章、ロプ砂漠の章からホルムズの章までに対応する。最初の56章については、訳者は短い断片——Fの第21・22・23章——しか残していず、作品を締めくくるのに使っている。この訳の原本として何かより揃ったものを想定しなければならぬ必要はない。我々にそう考えさせるような手がかりは、無名氏がより広範なモデルを前にしていたことしか意味しない。トゥルコマニア・大アルメニア・ジョルジアの章を再現できることからして、彼の訳が打っ棄っている最初の部分も眼の前にあったこともあり得ないわけではない。彼が訳していない最後の部分も、唯一別の典拠FGによって証言されているクブライ・カンとナヤンの戦いの個所の細部(f.17:「歌ととても美しい二弦の楽器の響き」)がFの第200章にそっくり繰り返されていることからして、彼は知っていたかもしれない。二箇所(Kのff.40vと46v)でオドリーコが引用されて利用されている。しかしこれは二つの例外的な脱線で、作品の基盤はただ一つマルコの書である。この改作者がいかなる意図で取り組んだのか確定するのは簡単ではない。いずれにしても、我々が前にしているのは極めて不注意で慌しい訳である。一番最初の数行からしてはや、奇妙なことに砂漠の両端ロプとサチョウ[沙州]が混同されており、この書の調子がどのようなものかすぐ分かる。内容は大きく要約されており、要約といわんより遠慮なく削られている。Fの第73、91-95, 101-105, 109-110, 176, 179章を欠く。あれほど豊かな記事に満ちた第87-90章は数行に減り、誕生の祝いと

白の祝いの区別がつかなくなっている。F の 137 - 138 章も内容がごちゃ混ぜになっている。勅命の牌子についての記事とキンサイに関する記事は、ポーロの話の脈絡とは何の関係もなく移動させられている。

今取り上げている訳は、一フランス・イタリア語稿本に基づいて行われたものである。K¹は、ザンギバルの黒人について「短い *crespis* <縮れた> 黒い髪をしている」と言う (K「短い縮れた髪」、K²: ナシ)。*crespi* <縮れた> はまさに F に用いられている言葉である。K の誤りの大部分はフランス語の読み誤りで説明でき (*enferme* <取り囲む> を *en ferme* <止まった>、*marche* <売買> を *marche* <印>、*lever* <上げる> を *laver* <洗う>、*savent* つまり *sauvent* <救う> を *sevent*)、いくつかの間違いの性質からして別の言語の中間写本があったとは思えない。K に、「とても綺麗な草と *ecaues* と良い牧草と大きな草木のある地方」(K¹「とても綺麗な草と葦と沢山の良い牧草」、K²「たくさんのきれいな草と牧草」) とある。*ecaues* は、私にはただ *eaues* <水> の間違いとしか思えない。F (64/6-7)「良い牧草と大きな川と *aigues* <水> がいっぱいある」を参照されたい。F (113/4) に「*soie* <絹> が大量にある」とあるところで、K はそれのみの独自の考察で我々を驚かす:「その地域を見る大きな *ioie* <喜び> と楽しみがあるように」。*soie* <絹> を誤って *ioie* <喜び> と読んで空想を膨らませたものに違いない。K によると、狂犬病を治すには蛇の胆汁を *in un po' di vino* <少しの葡萄酒に> 入れて与えるだけでよい。F では、それを *piccolo denaro* <小額> 分飲ますのである。*de vin* <葡萄酒の> と *denier* <お金> は、略記されるとけっこう取り違い易いことはもちろんである。F192/53-5 に該当する個所は、K「金 14 ペソもの重さがある」、K¹「金 14 ペソの重さがあり、金ペソは 1 リブラに値する」、K²「金 14 ペソの重さがある」となっている。F は *que peise libres XIV or poes*「14 リーブルの重さがある。さて皆さんは……できるだろう」であることからして、この改作者は F に近いテクストを用い、句読点を間違ったと推定せざるを得ない。

この改作者は、自分のテクストを飾ったり拡大したりすることよりも改変したり削除したりすることに心を砕いているため、

純粋に芸術的な発展、自分の個人的な空想の吐露にふけっているのは 2 箇所だけである (F140/60-3 - K f.40; F191/9 sgg. - K f.59)。[引用略]

もちろんこのテキストにも、例によって個人的な書き加え——注釈、短いコメント、何か崩れた箇所や不正確な解釈を合理的に継ぎ足すための努力——がなくはないが、全般的にずっと低い割合であり、一見して上の 2 箇所のように、この無名氏が何か我々に知られていない版を用いたという疑いは起きない。

F22/19 : 「＜蠅が悪さをしないように＞駱駝に塗布するのに良い」 F69/27-8 : 「彼らはテントの入り口を南に向ける、＜北をととても敬うからである＞」 F153/19 : 「町は＜ヴェネツィアのように＞すっかり水の中にある」 F153/13-4 : 「それが本当であることは、私マルク・ポールがキンサイの町について皆さんにお話し、お見せしよう、＜私はそこにグラン・カンの用事で一か月いたことがあるからである＞」 F171/12 : 「私マルコはその町にあって＜数日滞在したが、その間他のパンは食べなかった＞」 [以下略]

ここに引いた一見新記事と見えるものの多くは、実際は訳者の単なる取り違えである。名の知れぬカタロニア語改作者は事実、言葉の知識と才能の点で自分に取り組んだ仕事より大きく劣っていることを暴露している。彼が用いたフランス語稿本がどのような状態だったかは分からない。いずれにしても、彼の書を少し近寄って調べてみれば、しごく頻繁な誤りの大部分を彼の責に帰せしめても不当であることを恐れる必要はないと思えるほど、全体として単純で軽率という印象を受ける。

F59/2-3 : 「その地の大君はカムルと呼ばれる」 F62/3-4 : 「この大地方の首長は偶像教徒である」 F62/12 : 「偶像教の聖職者は他の者たちより貞潔に生き、淫蕩から厳しく身を守るが、他の偶像教徒は罪しか犯さない」 F69/39-40 : 「それぞれもし欲しければ 5 人の妻をめとることができる」 F72/33 : 「彼らの馬は＜どれも＞黒色である」 [以下略]

このテキストでは、人名と地名がひどく崩れていること、また数値も大部分それに劣らずひどく変えられていることが加えられなければならない。この我々が大旅行家の書のような商業的・地理的重要性をもった作品を評価し広めるにかくもふさわ

しいカタロニア人のごとき国民に、このように不幸な形で伝わったのは残念なことである。⁶⁾

フランク・イタリア語テキストに基づいていることは確かであるが、これまでに検討してきたFのどれに最も近いのか、確定することは残念ながらできない。いくつかの証拠からして、私にはF¹との親戚関係が一番近いことがうかがえるように思える。F74/22-4の該当個所はKにはかなり異なった細部があり、もっともこれは拡大解釈なのかもしれない：「この地方には二つの人種がいる、一つはフンクと呼ばれ、最初に生じたものである。もう一種はマゴルで、タルタルだったからである。＜そしてそのため何度かこのタルタル人はマゴルと呼ばれるのである＞」。ところが、FA¹にはまさに次のようにある：「タルタル人がそこから出て来る前は、この地方には2種類の人々がいた。ウングが土地の者で、ムグルがタルタル人だった。＜そしてそのため何度かタルタル人のことがムグルと呼ばれるのである＞」。F121/1は、KとFGではともに同じく特徴的な形で「金貨」と変えられている。F140/16は、FGではファクフル王は「この地の者が百の眼を有することは考えられないゆえすっかり安心していった」と解説を加えているが、Kもその個所を同じ文体的調子でもって記している。F(164/8)は、ジャヴァ島には「多数の船がやってくる」とあるが、FGは違ったニュアンスで、その島には「多数の船がある」という。KはFGと同じニュアンスである。緑のオウムについて(F181/f)、KはFGに特有の細部を保っている。KとFGはF193/54に対して同じ異なりを見せ、ともにインド諸島の1万2千7百の島＜全て＞に人が住んでいると言う。他の二つのちょっとした一致が我々のテキスト[F]に指摘してある(190/b、192/e)。その他二つの対応については、つい先ほどこの章の中で注意を喚起しておいた。

誰しも分かるように、これらも決定的な対応ではない。前章で検討した極めて重要なグループL(p.208)とR(pp.62, 92)との少数の接点とて、全体的絶対的な結論にとって同様に不十分である。それらはしかし、Kが提供する明らかに空想ではない新記事かもしれないものを、我々がしかるべき注意をもって考慮するよう仕向けるに十分である。我々は、他のどのテキストにもない二つの細部を、ポーロのものの可能性のあるものとし

て記載した(p.106)。

2 チェッフオーニ抜粋

1430年と1431年の間に、余白を利用してそこに「素晴らしいことの中から」何かを書くためにわざわざ購入したダンテの美しい写本(Ms. riccard. 1036, cc.203-4)の最後の白紙数枚に、もう「歳で視力も落ちた」メオ・チェッフオーニ **Meo Ceffoni** なる人物がポーロのメモをいくつか記していた⁷⁾。彼は、マルコの書が「ヴェネツィアのリアルトの上に誰もが読めるよう鎖で留められていた」——満足 of いく歴史的な説明はまだ何も知られないが、まことに興味深い詳細——ことを伝え、そのメモの最後に、「この素晴らしい本のいろいろなところに言われているように、これを眼にし全部読んだ者なら知っているごとく、四つ折り 20 帖以上の大部な書である」と書いているが、それが自分の経験のことを言っているのか、それとも何かの本から引いているのかは分からない。この「抜粋」に先立つ説明からはもちろん全部読んだとは思えず、むしろそのわずかな抜粋のいくつかからしても、急いで読み飛ばしたことが考えられる：「マルコ・ポーロは、海陸の港、世界に見られる偉大な奇跡的なことを述べた本である。この書はヴィネーギアの一貴人がなしたもので、彼と次々に続くその4人の息子は、それぞれ上述のマルコ・ポーロの書にしたがって航海して行った」。抜粋は、そのいくつかはごく短いが、以下を取り上げている：大アルミニア、ジョルジェーラ **Giorgiera** (つまり F の **Giorgienie**)、カンバル **Cambalu**、プリサンギン橋、アカルチェ・マジン **Achalce Magin** (つまり **Acbalec Mangi**)、ジアンドゥ **Giandu** (つまり **Gaindu**)、「世界最大の」クィアン川、シンクン **Sinchun** (つまり **Sugiu**)、チン海の島々、大小のジャナ **Giana** (つまり **Java**)、セイルッラン **Seirllan** (つまり **Seilan**)、カイル、メリバル、マンディチカスタル **Mandicichastar** (つまり **Madeigascar**)、アンバシェ、アデン。いくつかのひどい誤りがすぐに目に付く：「油の泉が豊富に湧き、百隻の船でも一度に積めるほどだが、食用には適せず、*ma pure e' ne beono* <それでも飲んだり>病気に塗る」(おそらく F22/18 の *a boir l'ardoir* <湯を沸かすの

に>をこう読んだもの)。「聖リオナルドの *monache*<修道女>の使い」。「そこから *gialle*<黄色い>絹がやって来る」。「アンバシェはとても大きい地方で、中インド<の中に>ある」(<である>の間違い)。「メリバールは北方にあるとても大きな国で、<その上にあるように見える>」(F184/3-4「北極星が再び現れ、水面上より高く見える」)。「ついで *bari*<バーリ>に行った」(*Maabar*<マアバル>の間違い)。カイルは、「西から来る商品はすべてここに集まり、<それら商品の多くはアレクサンドリアに向かう>」。これはおそらく、F(184/31)でメリバールについて述べていることを不注意からカイルに当てはめたものであろう。これらの誤りのいくつかは、底本がフランス語であったことを思わせる。他の小さな証拠からその直接の近さが確信できる。ラムージョのおかげで補修できる F の不可解な個所(118/37-8)「マンジの境界の *leune* を意味する」は、ここでは「境界の *luocho*<地>を意味する」と訳されており、この訳は他のどのテキストにも確認されないもので、これはおそらく *leu ne de le confin*<境界にの地>とあったのを、*ne*<に>を削除してうまく訂正したものと推定される。統語上奇妙な表現「幾分より長くより細い *orbache*<ヤマモモ>のような葉を作った」は、モデルの影響で説明できる:「幾分より長くより細い *orbeque*<月桂樹>のような葉が付いている」。船とガレー船のはっきりした技術上の区別——「6千の石橋があり、その下を<船あるいはガレー船の>帆柱でも通れるだろう」——は、もちろん F(152/10)の単純な反映である:「6千の石橋があり、その下を1隻のガレー船でも通れるだろう」。Fがけっこう独自の表現となっているところ *se paise sor lui*「その上で草を食む」は、この抜粋でも *se pasce sopra lui*「その上で草を食む」となっている。いくつかの個所の文字通りさからして、いかなる中間版も考えられないほどである。例えば、次の個所を F 23/27-31 と対校されたい:「今お話したこの海はジェルゼラーリ[ゲルケラン／カスピ海]の海と呼ばれ、周囲 700 マイルあり、エウフラテス河その他の大河が注ぎ込み、山々に囲まれていることを皆さんに言うておこう。また最近ジェノヴァとヴェネツィアの商人たちがその海を航海している」。

チェッフォーニの断片は、これまで検討した諸グループから

独立しており、一フランク・イタリア語稿本から直接由来するものであることは、かなりの確実性をもって断言することができる。またこれは、固有名詞の崩れが示すようにおそらくもう後世のものではあるけれども、けっこう優れた読みを残しているに違いないと付け加えることができよう。事実、Fでも他の多くの版でも何らかの修復を必要とする一個所を、おそらく極めて純粋な形で留めている：「その町でかつて 5 千隻の船を見たと言う」(cfr. F148/13)。

しかし、この「抜粋」を重要なものとするのは、もし間違っていなければ、それが私の説、Fよりも本質的により保守的なフランス語コピーの存在、に新たな支持をもたらすからである。これだけが、プリサンギン橋の欄干がいか「美しい物語の刻まれた大理石で」できていたか、「大理石の小柱」の上に獅子の他にいか「赤・白・黄色・黒の像」があったかを我々に教えてくれる。R(我々のテキストの p.103)に述べられている「様々な彫刻」に対応する詳細である^{1*)}。同じく少なくとも部分的には、小ジャワの住民についての新たな細部はZおよびRと一致する(F167/d)：「彼らは何度かグラン・カアンに珍しい素晴らしい物、すなわち象と犀を贈る。大きなサルは小人のようで、大きく黒いオオタカは黒い獐猛なカラスのようで、ツルやウサギを捕る」。⁸⁾

3 ピエトロ・ダーバノの証言^{2*)}

著名なピエトロ・ダーバノ Pietro d'Abano(1250ca-1316ca)がこの大航海者に言及した文はよく知られているし、ピピーノ版の転記者の一人(Cod. lat. monac. 850)が、この我々が人物にとって誉れ高いことに、いかにそれを引いていたかはすでに見た。一見したところ、その文は単にマルコとの直接の対話の反響に見え、書かれた作品の反映ではない点で我々の研究から外れるようであり、したがって我々がたどってきたテキストの歴史とは関係がないかのごとくである。しかし私には、本当に『ミリオネ』はかの文とは無関係なのか自問してしかるべきと思える。

マルコについて、このアーバノ人は二つの異なった作品の中

で触れているが、二つの証言はつまるところ唯一のものに帰す。大著『哲学者と殊に医学者の相違の調停者』*Conciliator differentiarum philosophorum precipueque medicorum* の、「赤道下で生息可能か」どうかの問題を論じた「相違その六十二」で述べる⁹⁾：

「ジンゾ[ザンジバル]地方に袋ほどの大きさの星が現れる。私が知り合ったある人は、それはちょっとした雲のように微かな光を放ち、常に南の方角にあると語った。同じ事を他の人々とともに¹⁰⁾、かつて私が知った最大の遍歴者にして熱心な探求者であるマルクス・ウェネトゥスも、その星が南極の下に見え、彼がここにその形を描いたような大きな尾を有していることを私に語った¹¹⁾。また南の極がまるで地上から兵士の槍一つ分の高さのところに見えたこと、一方北の極は隠れて見えなかったことを語った。また、そこからカンフォラ[樟脳]・アロエ[伽羅木]・ブラジル[蘇芳]の樹が輸出されると我々に話した。そこはまた暑さ厳しく、住民は少ないと証言している。これらは、彼が海路至ったある島で目にしたものである¹²⁾。また、そこには大きな人間と、我々のところの豚のように太く剛い毛をした非常に大きな山羊がいると言う。そこへはまた、このように海から以外近づくことはできないと話している」。

他に、『アリストテレス問題釈義』*Espositio problematum Aristotelis*「第十六部、問題その八：熱暑地にいる者は臆病で寒冷地にいる者は勇敢なのは何故かについて」で、マルコの経験に言い及んで¹³⁾：

「また私は、赤道を越えこの辺で見かけるよりも大きな人間に出会ったマルクス・ウェネトゥス氏から、その地では身体を縮ませしたがって小さくさせるような寒さはないと聞いた」。

今日この著名なパドヴァの医師についてどのような判断を下そうとも、彼が当時科学者としてまた思想家として抜きん出た人物であったことは否定し難い¹⁴⁾。彼のポーロとの個人的な関係、この引用が垣間見させるその対話の性質、マルコの名にまつわりまたこの「彼は私に語った」および「私は聞いた」という言葉がいささか我々に感じさせる厳かさから窺われる感嘆のこもった判断、こういったものは、かの大旅行家が同地の人々から取り巻かれていた高い尊敬を示し、その書とは別に彼の生

の声が、まだ知られぬ世界のよりよい認識にとってどのような効果をもち得たかを証明している。しかもこの熱烈な賛辞は、かの書が世に出たより後のことであり、その大成功の証しとなっている。「そこからカンフォラ、アロエ、ブラジルの樹がもたらされると彼は我々に語った」との文は、マルコがこれらの貴重品の原産地を＜私に＞ではなく＜我々に＞実際に明かした書物のことを指していないことはありえない（我々のテキスト[F]の p.170sgg 参照）。

4 中世の文学と科学におけるポーロの書の反響

マルコの直接の偽作者についての広範で組織的な研究——特にかつてマルコのパロディー作者で剽窃者、彼の栄光の競争相手でそれを横取りしたマンデヴィル——ボッカッチョ^{3*)}からラブレーまで、『スペインの登場』から『狂えるオルランド』まで、『ミリオネ』が文学と芸術に残した痕跡の今少し深い分析、歴史学と地理がポーロに負っていることの正確な評価、これら様々な興味深い研究は、それに誰か優れたロマンス語学者がすぐにも取り掛かることを期待するものであるが、本書の目的にとっても全く無駄ではあるまい。また我々の中心的な目的、ポーロのオリジナルテキストの再建にとってたとえ無駄となろうとも、反響を留めている版が同定しえるあらゆる場合に、個々のグループについて述べられたことの興味深い補完として役立つであろう。これまでの章——そこから疑いもなくこの作品の急速で広範で継続的な普及が結果として明らかであるが——およびすぐ上に挙げたいいくつかの破廉恥な例は、マルコの書が14・15世紀においてほとんど無視されていたという根強い意見をそうした研究によっても否定できると主張することを可能にする。この偉大な同時代人についてのダンテの沈黙は、まるで一詩人の作品が彼が読んだものの全ての記録であり、また中世にはダンテ以外には存在しなかったかのごとく、愚かな形で一般化された。わずかながらマルコ・ポーロ研究者がそれぞれに繰り広げる証言——ピピーノ、ジョヴァンニ・ヴィッラーニ、ピエトロ・ダーバノ、ジョヴァンニ・イブレス——それに『ボードゥアン・ド・セブール』*Baudouin de Sebourg*における『ミ

リオーネ』のわずかな反映だけが、現在の認識と我々の個人的な教養に釣り合った単なる証拠として留まる代わりに、マルコ・ポーロが生前手にした栄光全体を構成してきた。もちろん、ポーロのようなはっきりと科学的な作品にとって、いくつかの文学作品を輝かす強力でほとんど病的な威信はなかったし、あり得なかったであろう。しかし、本来権利のあった成功まで否定することは全く身勝手というものである。ピエトロ・ダーバノからトスカネッリまで、無名のジョヴァンニ・ティネムスの『黄金史』から今では劣らず無名のジョヴァンニ・ディ・ボーヴォの『世界像』まで、すぐにヨーロッパ文化の泉の一つとなり、それであり続けたのだった。今日なら学問的成果とか科学的普及と呼ばれるようなものが、中世を通じてよりよく検証されるべきであろう。私にはそれを特に雄弁に語ると思われ、またマルコ・ポーロ研究者に全く知られていない二つの例をここに引こう。

ドメニコ会士フラ・フィリッポ **Fra Filippo** は、その『雄弁の手引き』*Liber de introductione loquendi* にいっぱい詰め込まれ、精神的な弁証法を行使している<エクセンプラ>[説教範例]中に、ポーロの話の<逸話>の二つ、最後のカリフの死と山の奇蹟についてを入れている。この修道士の稿本の筆跡からして、同書が千三百年代最初の数十年に置かれるべきことは疑いない。¹⁵⁾

「マルクス・ミリティス・ウェネティイス殿は、ウアルダック[バグダード]は当時歩兵を除いても 10 万の兵士がいた大都市だと語っている。そこには、全キリスト教徒の教皇にあたる全てのサラセン人の主であるカラフス[カリフ]がいた。<そこでは、マコメットの法、降霊術、哲学その他あらゆる学問が研究されていた。>1255 年のこと、全タルタル人の主マグヌス・カニス[グラン・カーネ]は大軍を率いてウアルダックを攻め、町を奪った」[以下略]。

その無骨さにおいてかくも独特に純粋なこの文章をマルコの該当箇所(F25/15-32, F26-29)と対照させてみると、F のいくつかの表現が写されている文字通りさに気づかずにはおれず、一フランク・イタリア語稿本からの直接の訳ではないかと考えぬわけにはゆかない。なかでも、問題のある *eu plain de cele*

montagne<その山の平地に>をそのまま忠実に写した ad planiciem montis<山の平地に>を注目されたい。いずれにしても、フラ・フィリッポが用いたテキストが F 以前の段階の特徴的な完全性を備えていたことは確実である。イタリック体の言葉[< >内]は F にはみられないが、Z・Z¹・V・Lによって確認される(cfr. F25/b)。

底本の古さと良好さで興味深いこの断片は、選択された個所の傾向と、著者がポーロの言葉を書き写し解説するときの尊敬にみちた忠実さの点でもそれに劣らない。というのは、興味深い書き足しを加えているからである。福音書の言葉の芥子粒の中に、彼は完全性の象徴を見る：「芥子粒ほどの信仰をもつものは、完全この上ない形で信仰をもっており、それがよく奇蹟を行うであろう。そのことは、大きさにおいて最小であるがどんな粒よりも強いというこの粒の中に示されている。またどんな粒よりもまん丸で、形はどんな形よりも完全この上ない」。また、何か恥ずべきことをすると本当に目をくりぬくべきかどうか自問し、そうした機会を避けるよう忠告して答える：「悪い仲間に近寄るなかれ」。

ドメニコ・バンディーノ・ダレッツォ Domenico Bandino d'Arezzo の『記憶すべき世界の源泉』*Fos memorabilium universi*——千三百年代におけるイタリアの学問がどのようなものであったかを理解するためにまさしく基本的な作品——の中に、『ミリオネ』がほぼそっくり採録されている¹⁶⁾。かの偉大なヴェネツィア人を引くのに、「ほぼ我々と同時代人」「我々に近い年齢」と呼んではいるが、バンディーノがこの大部な百科事典を編んだのは 14 世紀最後の数十年だったことが知られており、かの書が最初に世に出てからほぼ一世紀のこの隔たりが、彼が用いたポーロの版が残念ながら極めて二次的な性格のものであったことを物語っている。彼が前にしていたのは、すでに触れたように LA の一コピーであった。この巡礼情報の多様な鉱脈にすっかり惹かれて¹⁷⁾、利用した要約を内容と形式において十分に尊重し、その度に自分の典拠を学問的な正確さで引用しながら、それを自分の作品の様々な部所にアルファベット順に配したのだった。マルコ・ポーロは、その歴史の部と宝石・樹木・四足獣に関する自然研究の章にいくつかの要素を

提供しているし、地理の部では主要な著者の一人であり、オリエントに関しては最大の源泉であった。「人種の巻」では、ゲオルギアーニ（グルジア）、ゴイン（ガヴィ）、ヘリ（「ヘリという名のインドの国にいる人々」、明らかにエリ）インディ、テベツト、トゥルコマニアについての記事がポーロに由来している。「地方の巻」では、アコン（この名のもとに F ではエシェル・ドゥファル・カラトゥに属する記事が一まとめにされている）、バルダスティア（バラシャン）、バルガナ（バンガラ）、カムル、カラハン（カラジャン）、キンクィタラス（ギンギンタラス）、クレティーナ（ケルマン）、フグル（フジウ）、インディア、マハバル、マンジの項目が、ポーロから採られている。「都市の巻」では、バルダック、カンバレク、キンサイ、サバ、セバステ、シングイ（スジウ）の章がポーロのものである。「島の巻」では、カラキラル（ザンギバル）、セラнке（セイラン）、ジムパグの章。ポーロ起源の細部が、どの個所にもといていいほどのアレツォ人の膨大な編纂書に見られる。疑惑や不信をもらすような但し書きは一つもない。それどころか、自分の個人的な体験でかの旅行家の情報を確認することまで起こっている。

4 *)

結び ^{5 *)}

我々がこの仕事に取り掛かったとき、ポーロのテクストの歴史と呼べるようなものは何もなかった。今に残っている材料の系統的な探索はまだ誰によってもなされていなかっただけではない——だから我々はコルディエによって挙げられていた 78 の写本 ^{1 8)} にさらに 60 ばかりを加えることができたのだが——すでに知られている記録を、それらの間の関係を明確にし、オリジナルに対するその価値を客観的に確定するべく、方法論的に批判的な検証のもとに置くこともなされていなかった。一つのポーロ問題、すなわち対立する多くのテクストのどれにマルコの本当の言葉を見出すべきか、については認識されていた。しかし、今に伝わる稿本の全体に解決を求め、それらを超えて何らかの失われた版に遡ることは、必要であったにもかかわらずなされなかった。出版によって身近なものとなった三つか四

つのものの中から、最も優れていると思われる一つを選べば十分だと考えられていた。ポーロ研究に支配的な考えは、こうした一貫性を欠くヴィジョンの当然の反映だった。これに先立つページの中で徐々に我々は、いまや公理にまでなったいくつかの忌まわしい見解を根こそぎにする必要に迫られた。すなわち、パリ国立図書館写本 fr.1116 はジェノヴァの獄で作成されたオリジナルと当然みなしえるものである；ポーチェが自分の出版の基礎に用いた諸写本はマルコ自身によってなされた改訂を表している；現存するポーロの版は全て直接あるいは間接にいわゆる地理学協会テキストから派生している；いわゆるラムージオの追加は、つまるところ厄介で邪魔な付属品に過ぎないが、それがポーロの手になるものであることを絶対的な形で退けることはできないから、用心のため何か補遺に追い遣っておけばよく、fr.1116 と対立するところは全てはつきりと偽文として考えるべきである、といったものであった。ユール自身、つまりより生き生きとした情熱とより明快な直感でもってポーロ問題に取り組んだ人物、写本のリストを自著の第2版から削除することによって、この分野での自分の予備調査の不十分さを理解したことを示した彼までが、共通の偏見に取り付かれたままだった。その翻訳が拠って立つ経験的折衷主義は、様々な支配的仮説を、根拠付けることもそれらの対立を乗り越えることもせず、そのまま受け入れたのである。地理学協会テキストが最初の純粋な編纂に沿っていると深く確信し、ポーチェのテキストがそれより優れているとは何ら心底から納得することのないままに――だからこそ、改訂があったとすればそれは表面的で不完全のものだったにちがいないことを認めざるを得なかった――後者を底本として採用した。また彼は、ラムージオは偽文者ではなく、失われた諸写本を活用したと深く確信していた。にもかかわらず伝統的な先入見に敬意を表して、それ固有の新記事の中にはマルコが自分の書に付け加えたかもしれないその時々への補足を見るに留まり、F より彼方には視線を延ばすことはできないと信じ込んで、F とラムージオが用いた諸稿本がひょっとして共通の親の単なる派生物であるかどうかを自ら問うことはついになかったのだった。

今に伝わる全ての版を客観的に分析し、放ったらかしにされ

たり知られぬがままになっていた膨大な材料へ調査を拡大することによって、我々は根本的に異なる問題設定と予期せざる解決へと導かれた。事実の単純な論理が我々に打倒することを可能にした数多くの執拗な誤りを振り返ることはさて置き、我々が到達したと考える新たな積極的な結果を簡単にまとめよう。

現在知られる写本のどれも、ジェノヴァで編まれたものの純粋で単純な再生物と見なすことはできない。

かの作品は、明らかなことだが、最初ルスティケッロ・ダ・ピーサによって与えられたフランス語¹⁹⁾の姿で広まった。その直接の記録は、fr.1116とコットン断片の二つだけである。しかし、その普及はけっこう著しいものであったことが確信できる。なぜなら、ポーロの他のテキストが全てすでに他の言語への翻訳か書き換えであったとすれば、それが翻訳であること、そして何らかのフランク・イタリア語稿本からの翻訳であることを証明することができるからである。写本の大多数を系統樹的に再整理し、最初の明快なグループ分けからさらに広いグループに遡っていくことによって、一つのフランス語原本に基づいて作られた限られた数の祖本を特定あるいは復元し、それら祖本自体を通じてその失われたモデルを推定することができる。こうして我々は、もはや二つのテキストではなくただ一つのテキストを前にすることになる――なぜなら、目下のところ F はポーロの書のこの最初の形を比較的完全に証言する唯一のものだからである――。しかし F の仲間は少なからざる数であり、推定によってそこに以下のものを付け加えることができる。二つの異なるラテン語版モデル、三つの異なるヴェネト語訳モデル、一つのトスカナ語訳モデル、一つの良いフランス語への改作モデル、一つのカタラン語訳モデルである。これらは全て、すでに示したごとく一つのフランス語オリジナルに由来する版である。今に伝わる二つのテキストの間に横たわる深い異なり、したがって上に挙げた翻訳の特徴的な差異は必ずしも全て翻訳者の責に帰せしめられないという蓋然性、F 自身がすでに被っている否定し難い手入れ、これらもまた、かのフランス語の姿で広まったものが深刻な改変を免れられなかったに違いないことの証しでありえる。それは物語的なテキストが、とりわけもし芸術作品でなく自らの美しさの意識的なシンメトリーによっ

である程度保護されていないときには、常にさらされているものである。

その成功は、我々の目にはその証拠と写るこれら翻訳そのものによって、とりわけ VA と、VA からの派生のうち最も名高いものすなわち P によって、しかもけっこう早い時期に止められたにちがいない。

パリ国立図書館の fr.1116 は、形式においても内容においてもジェノヴァの原本からすでにけっこう遠い一本である。

この我々が知る唯一のフランク・イタリア語稿本の中に、ルスティケッロのフランス語がそのまま残っていると幻想を抱くことはできない。パリ国立図書館の fr.1463^{6*)}、コットン断片、Z や V という翻訳を通じて元の読みを垣間見ることが可能なそのモデル、これらとの対照は、中世のテキストがどのような形式的揺れを被ったか思い出させるに充分である。しかしながら、被った変貌がいかなるものであれ、形の上で失われたオリジナルに最も近く、言語の観点からその影を留めている稿本は、目下のところこの F である。また、その言葉にヴェネト語の基層の見られるものがポーロに由来するのであれば、かの旅人の実際の言葉を最もよくこだませているテキストもまたそれであることを付け加えられたい。これだけでも F は、マルコ・ポーロの遺品の中で名誉の地位に値する。また、今日では手に入れることは不可能であり、文献学的にも使用に耐えないルーの古い版^{7*)}に代えて、それにふさわしい新たな版を提供することが必要だった。

形の上で F よりも保守的なフランク・イタリア語コピーの存在を証するテキスト自体が、さらに完全なもののあったことをも証明している。しかしながら、もし F の純粹で単純な一つの版がまだマルコの書の版ではないのならば、また、祖本に到達するには、転記者の不注意か恣意によって奪われてしまった少なからざるまた短からざる部分を F でもって埋めなければならないのなら、現在我々がもっている稿本の中で、内容の点からも全体としてオリジナルテキストに最も近いのはやはり F である。今日写字生による手入れを修復することを我々に可能にさす諸稿本は、たとえ個々の点ではより完全であっても、全体としてはより断片的である。Z は不完全な形でしか伝わっていな

いし、Z¹はラムージョがそれでもって自分の刊本を豊かなものにした散発的な「抜き書き」を通して知られるのみである^{8*)}。Lは全くの要約だし、Vはひどく崩れた後世のただ一つのコピーの中に伝えられているにすぎない。

我々にとって今ある材料から可能なマルコ・ポーロの科学的な版にあっては、Fが基本的な核となることはしたがって避け難い。必要なところでFを補うために、他の数多くの重要な保守的要素が、残りのポーロ版からそれに加えられなければならない。しかし、それら様々な要素の外面的な立場がどうであれ、もしその仕事が実際にはっきりと異なる二つの部分、一つはFの版、もう一つは祖本を補うためにそれに欠けているもの全てを残りの写本の伝統の中に求めること、この二つに分かれるかに見えようと、またたとえ莫大な量の稿本が実際的に二つの大グループ、つまりFを確認しそれによって証言されている局面に尽きるものと、それ以前の一段階の存在を記録しているもの、この二つに分かれるかに見えようと、唯一の方法によってのみ解決可能なこの唯一の問題に直面していると感じない者は、その目的に全面的に失敗するであろうし、Fの適切な版にもその補完物のもう少し確実な収集にも成功しないであろう。研究の現状では、マルコの書の真正な版はポーロのテキストの歴史、別の言葉で言うならばその原初の全体像の探求以外ではありえない。それは唯一の基盤、上に述べてきた何世紀もの写本の伝統が全部まとめられ詰まっている祖本の小グループの上に立って作業を進めなければならない。全く知られなかったマルコ・ポーロの多くのページを何世紀もの没却から救い出し、誰の手になるのか疑われていた多くのページを確実にポーロの誉れに高めることを可能にしたその同じ基盤は、Fを出版する者にも別の形でも、マルコの考えに再び生命を与え、写字生が削ったりゆがめたりした無数の文に意味を回復するのにかなった手段を提供するのである。

この後続くテキストが、この「序」がそれでもって閉じる大胆なプログラムの正しい実行となっているかどうか自らに問うとか、あるいは博識の読者に問うことは我々はしないであろう。この序とテキストは本書では不可分の一体をなしている。ただ一つの同じ解決の外見上のみ異なる表現であり、その内的

本質において判断されるべきである。失われて何世紀もの後マルコ・ポーロの真の作品、マルコ・ポーロの＜全＞作品を再発見するという野心的な企てに初めて取り組むことによって、それがいかにして可能かを事実でもって示そうと試みてきたし、またそれら事実そのものを過去の誤ちとありうるかもしれない今日の不信に対して護ってきたのであった。

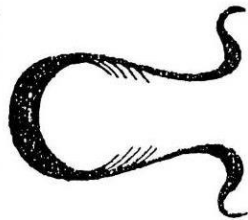
題材の順序と展開は、こうして取り組まれた試みの新しさ自体から自ずと決まってきた。この最初の補完版では、失われたオリジナルがそれでもってほとんどモザイク状に再構成されることになる様々な要素が、それらが今に伝わっている言葉と形において区別して残され、読者に提供されている。しかしながら、誰かか奇特定のロマンス語学者が、異なる材料に再びしかるべき言語的統一を与え、それを一つの現代語訳に溶け合わされんことが期待される^{9*)}。それこそが『ミリオネ』の最初の本物の訳となろう。

もちろん我々は、我々の中心テーマと強い関係にある問題のみに止まった²⁰⁾。しかし我々は、本書は我々にとっても他の人々にとっても、新たなはるかに多様な研究へと進むべきドキュメント的な基礎に過ぎないと信じている。そして、もしこれがポーロ研究における新たな実り豊かな熱意の始まりを印すことになれば、我々の労苦は立派に報われたと考えたい。[完]

【原注】

1. 失われたポーロ写本の内、Foscarini, *Storia della lett. Venez.*, 1854, p.524に Poleni 侯爵蔵として言及されているものは、VA の一種と思われる。事実、筆録者の名は Rostaccio Pisano とあり、同グループに特徴的な読みを示している。
2. Cfr. G. Vacca, *Un manoscritto inedito dei viaggi di Marco Polo*, in 《Rivista Geogr. Italiana》XIV, 1907, pp.107-8.
3. Baldelli-Boni, *Storia del Milione*, p.132, Lazari p.453, Yule n.51はこの稿本を14世紀のものとしているが、私には全くの誤りと思われる。
4. Cfr. K. Herquet, *Juan Ferrandes de Heredia Grossmeister des Johanniterordens*, Mülhausen 1878.

ior circuitos et diligens indagatorque eandem vidit stellam
sub polo antarctico: et magnam habens caudam: cuius pin-
xit talem fore figuram.
¶ Retulit etque vidit po-
lū antarcticū a terra ele-
uantē cōstitare lacce mili-
tis lōge in apparentia et
arcticū occultatū. Inde
etiā nobis cāphozam: li-
gnū aloes et vergi expor-
tari nūtiavit. Testat il-
lic calozē intēsus et habi-
tationes paucas. hūc de-
vidit in quadā insula ad
quā p mare adiūit. Dic-
titūz illūc boies fore et arietes qmagnos valde habētes la-
nas grossas et duras ut fere sūt porcorū nōvūz. Et q ad bō



5. Cfr. R. Beer, op.cit., p.97.
6. カタラン世界図の説明の一つ、正確には「カンバレク」市についての説明は、この版に遡る。
7. S. Morpurgo, *I mss. della bibl. riccardiana di Firenze*, 1893, p.32.
8. セイロン島の宝石に関する新しい記事、すなわち宝石の産出はそこを吹き渡る「三つの風、西風・南西風・南風」によるというのは、写字生の単なる空想の逸脱であろう。
9. 引用は、1521年の Scoto のヴェネツィア版より、cfr. f.97A.
10. 原文: De ipsa quoque cum aliis mihi retulit Marcus Venetus は、「このことをヴェネツィア人マルコが、そしてく彼とともに他の旅行者が>私に語った」と解釈するか、それとも Yule が *Introduzione* p.120 に訳したごとく「このことと他のことについて、私はヴェネツィア人マルコから話してもらった」ととるべきか、私には決められないように思える。
11. その図は 1476 年その他の版にはなく、1548 年版 f.106 に掲げられている。[下図 1]
12. Cordier-Yule ではこの島は<当然>スマトラとされているが、確実ではない。マルコの書では、体躯の巨大さが記されるのはザンジバルである。[訳註: マルコはザンジバルには足を印していないと見られる]
13. 引用はマルチャーナ図書館写本 (cod. Lat. 2465, cl. VI 126) より、cfr. f.86 c .
14. Cfr. S.Ferrari, *I tempi, la vita, le dottrine di Pietro d'Abano*, Genova 1900, in 《Atti della R. Università di Genova》XIV (ポーロについては pp.18, 121, 275); Id., *Per la biografia e per gli scritti*

di Pietro d'Abano, in《Memorie della R. Accad. Dei Lincei》XV, 1918
(ポーロとの関係については p.653).

15. Cfr. ミュンヘン国家図書館 cod. lat. 16126, ff.48r-49v. 他にこの作品の稿本を私は知らない。作者については何も知られない。
16. Cfr. マルチアーナ図書館 cod. lat. cl. X. n.CXXIV. Bandino については、cfr. L.Mehus,『*Historia litteraria florentina*』, in *Epistolae di Coluccio Salutati*, Roma 1891-1911.
17. この作者は *De viris claris*『有名人について』でも、「ヴェネツィア人マルクス・ポルスは主の 1284 年東方の地と風習と住民について楽しい本をものした」と書いている。
18. すでに何度も引用してきたユールの写本リスト 85 のうち、21, 28, 57, 61, 62, 72, 81, 83 番は、現在では紛失したかあるいはその存在が十分には確証されないゆえ、抹消されるべきである。「補遺」中のコルディエの追加リストで、それ以前のリストに対して実際に新しいのは二つだけである。
19. ‘フランク-イタリア語’という呼び方は、ルスティケッロとマルコ、ルスティケッロは彼のいるところできっとその直接の絶えざる監督下で編纂したのであろうが、もちろんいささか不合理なものとなる。彼らはきっと単にフランス語で書こうと考えていただろうからである。私が‘フランス語’ではなくこの‘フランク-イタリア語’なる用語を好んで採ったのは、オリジナル版をその後の他のフランス語版、とりわけグレゴワールの改作版と区別するためである。
20. 例えば、全くの F の言語についての研究となることを恐れた。この興味深い問題については、特別の論文が出るであろう。そうした論文の題材の目録は、同時に我々のテキストのフランク-イタリア語の部分の索引となるだろう。

【訳注】

1. 事実として当時、プリサンギン橋の欄干の大理石に「物語が刻まれていた」か、小柱の上に「赤・白・黄・黒の像」があり、それが「獅子以外の」ものであったか、確かではない。様々な姿の数百の獅子の像が様々な色の石に彫られているのは事実であるが、それを見誤ったかあるいは後世の補筆も疑われる。
2. Pietro d'Abano (1257-c.1315)：当時著名な医学・哲学者、長くコンスタンティノーブルやパリに旅行、パドヴァ大学教授。天体現象を研

究し、人間界の事象をその影響の下に説こうとしたため異端の疑いで審問され、1315年訴えられて断罪、死後も埋葬されることはなかった。宗教的啓示に対する理性的真理の優位を説くアヴェロイズムの徒だったとも伝えられる。

3. 『デカメロン』第6日第10話「チポッラ修道士の東方への旅」、第10日第3話「ナタンとミトリダネスの寛大さ比べ」は、マルコ・ポーロを下敷きにしたもの（Cf. 拙訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会 2019）。
4. 「カタラン・アトラス」（1375年スペイン・マヨルカ島）の東方は、絵図も地名も全面的にマルコポーロから取られているが（図9・10）、それへの言及がないのは遺憾である（同上）。
5. この「結び」Conclusionèは、全体に対するもの。
6. ルスティケッロ作とされるアーサー王騎士物語のパリ国立図書館蔵写本fr.1463。本書の第1章「フランク-イタリア語版（F）」（拙訳）参照。*Il romanzo arturiano di Rustichello da Pisa, a cura di Fabrizio Cigni, Pisa pacini Editore 1994*に、同写本の全ページのカラー写真、原文の転記、イタリア語訳、解説と注がある。
7. 1824年フランス地理学協会『旅行記回想録集』*Recueil de voyages et mémoires*第1巻にRoux de Rochelleにより刊行された写本fr.1116の転記（cfr.本書第1章「フランク-イタリア語版」）。
8. ゼラダ手稿の原本はその後1932年、トレドでパーシヴァル・デーヴィッド卿によって発見され、1938年ムールによって出版された。したがって今では、その原本がZ、ベネデットがアンブロジーナ図書館に発見したトアルドによるその写しがZ¹と呼ばれる（cfr.本書第6章「F以前の段階」）。
9. *Il libro di Messer Marco Polo cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le meraviglie del mondo, ricostruito criticamente e per la prima volta integralmente tradotto in lingua italiana da Luigi Foscolo Benedetto, Milano-Roma Treves-Treccani-Tumminelli 1932-X*は、ベネデットが自らこれを実行したイタリア語訳である。*The travels of Marco Polo, tr by Aldo Ricci, George Routledge & Sons London 1931*はその英訳、愛宕松男訳注『マルコ・ポーロ東方見聞録』（1・2）東洋文庫 1970はさらにそれからの和訳。

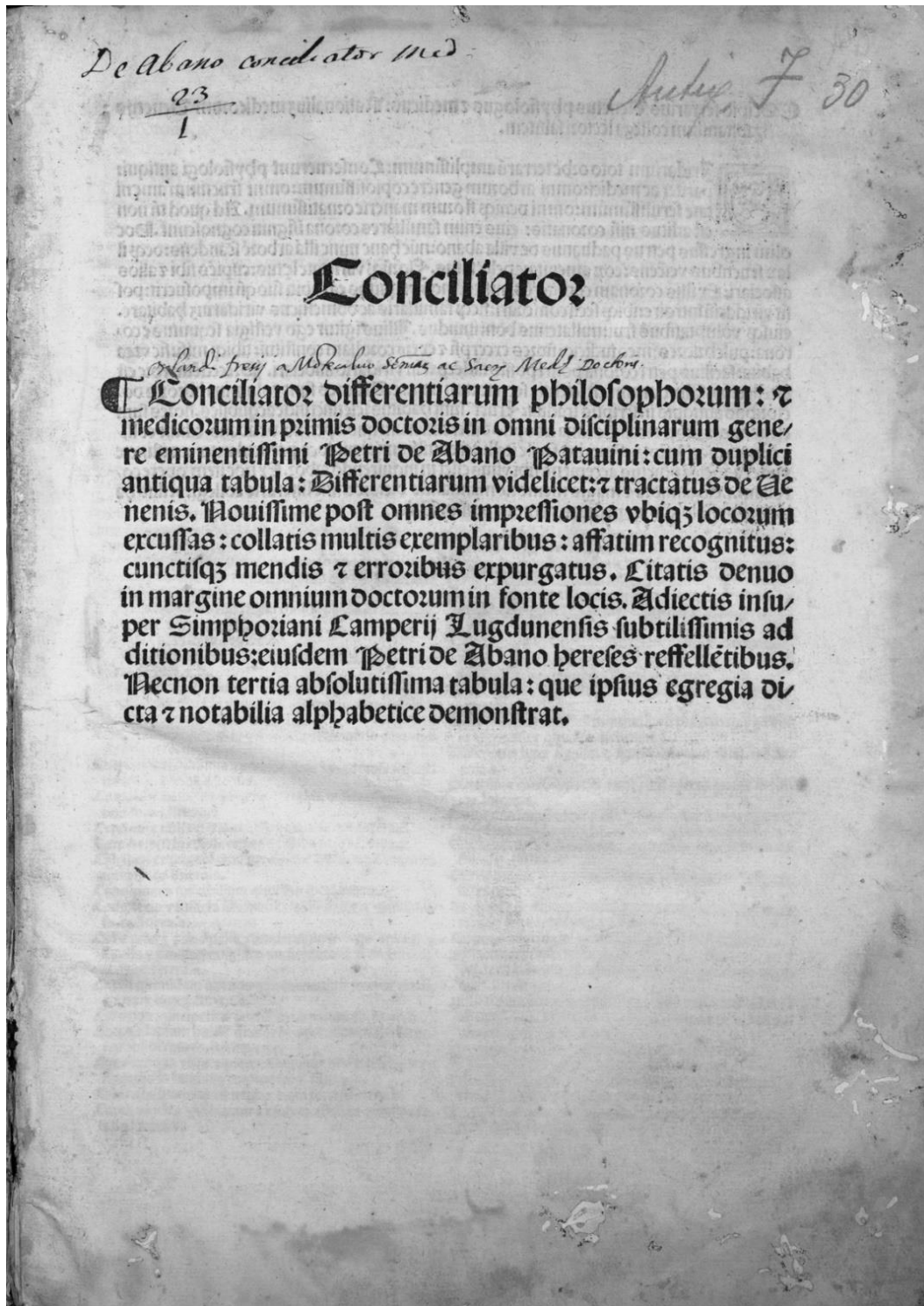
[illegible]

図 4 K² (アラゴン語訳) : Madrid, Escorial, Ms. Z. I. 2, f. 58r (同)



Ms. A, Escorial, Z.I.2, fol. 58r.

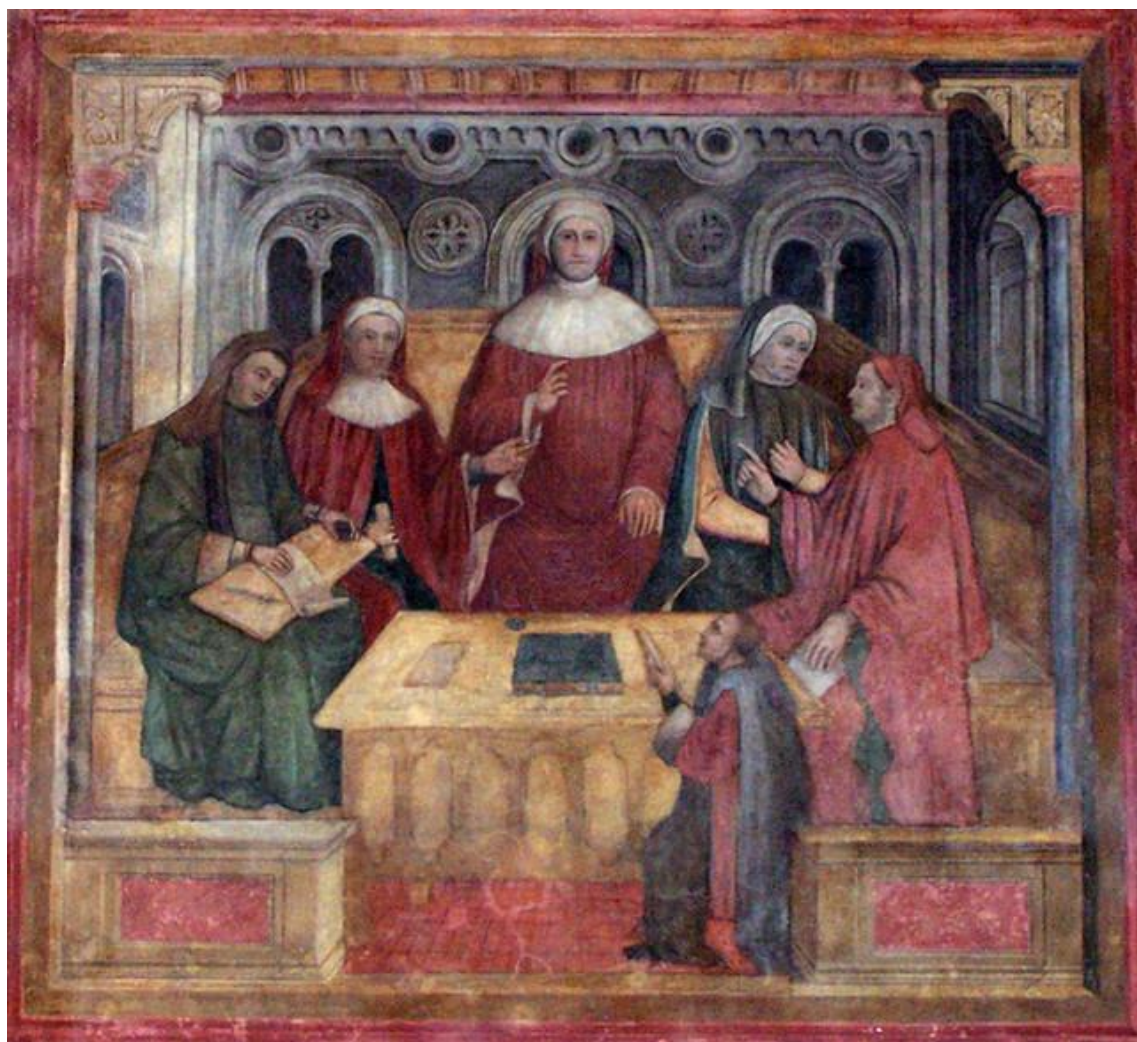
- ☒ 5 Pietro d'Abano, *Conciliator differentiarum philosophorum et prepique medicorum* (Biblioteca Europea di Informazione e Cultura)



☒ 6 Pietro d'Abano : Giusto di Gand, ca1473-75, Musée du Louvre.



⊠ 7 Pietro d'Abano, professore, Palazzo della Regione, Padova.



☒ 8 Pietro d'Abano, Padova, Abano Terme.



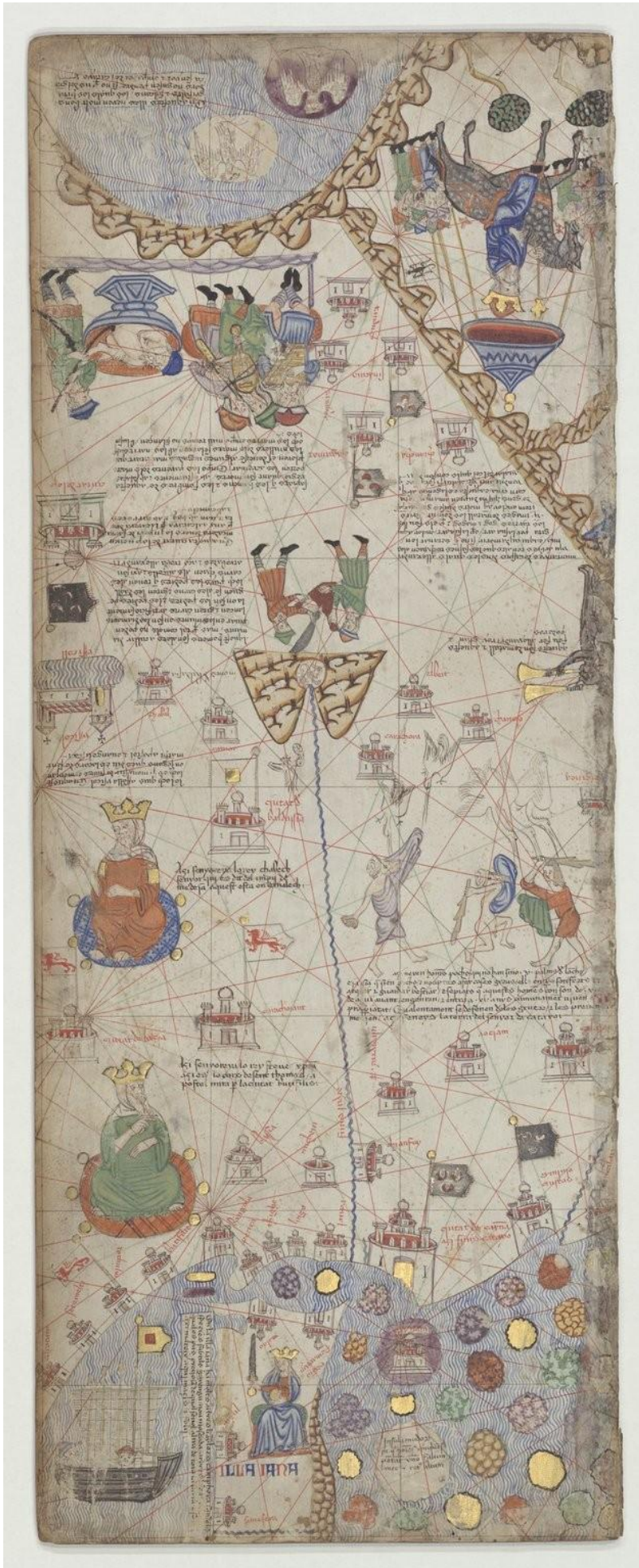


図 9 カタラン・
アトラス VII

図 10
カタラン・アトラス
ス VIII

